日本クリスチャン・アシュラム連盟　夏季号

開心
静聴
充満
献身
奉仕

日本アシュラム

Summer 1979　United Christian Ashrams of Japan　28

▼連盟は創始者の祈りによって各地に生れたファミリーの全国的な交わりであって、常に新しい家族（単位）の参加を期待している。

黙想

〈静聴の時〉

アシュラムの目標

パウル・ワグナー師

聖書・イザヤ書三五章

唯今から一同静まってこの聖書の一節を瞑想し、主の御前に祈って頂きたい。（十分間程一同黙想）この朝の静聴は全体で恵み分ち合う時であるが、お互いに国語がちがうため十分にできないかと思う。しかし私たちは祈りのうちに受けた恵みを分ち合いたい。私はイザヤ書三五章によって、クリスチャン・アシュラムに与えられている四つの期待をお分ちしたい。

第一にアシュラムの目標は何か。第二はそれに到達するにはいかなる手段方法があるか、と言うことである。その過程は四つの期待において見られよう。

一、クリスチャンの健全な品性の成長
二、自己を犠牲的奉仕に献げて行くこと
三、完全な品性にされる賜を受けること
四、神の御霊を頂き、満されること

そこでまず御言に心を向けよう。最初に荒野という字が出てくる。私たち人間は、皆人生の荒野を行く旅人である。その捕囚の身から自由を与えられるためには、神の導きを受ける必要がある。しかし今日の人間は自ら荒野を作り出している。公害の荒野、不道徳に崩れた社会、神のかたちに造られた人格を破かいした非人間性の荒野である。

アシュラムはこの状況から第一の目標即ち健全な品性を成長させることであって、それには神の御子イエスを私たちの人格の主として迎えることが第一である

一、健全な品性の成長

三五章の初めに三つのことが書かれている。「荒野とかわいた地とは楽しみ、喜び、かつ歌う」と。クリスチャンは信仰の喜びに導かれた人々のことである。従て私たちは歌う人間である。所がイスラエルの子らはバビロン国に捕囚となり歌うことができなかった。柳の木の下に坐って、異郷の地でどうして神をさんびすることができようかと嘆いた。私たちも歌を忘れてはいないか。主の喜びを失ってはいないか。アシュラムにきて主の救いを見出す必要がある。

ワグナー博士

また「砂漠は喜びて花咲き……」とある。私たちはどこに美を発見すべきであろうか。健全な品性とは美しく成長するものである。主イエスは良い羊飼いである（ヨハネ伝十章十一章）が、この良いという原語アガトンには美しいという意味がある。つまり主イエスは美しい羊飼いであった。私たちの品性をこのような羊飼いに導いて頂くことである。

更にすばらしい成長がある。「これにレバノンの栄えが与えられ、カルメルとシャロンの美しさが与えられる」とある。アシュラムにおいて私たちは主の栄光、神の美を見ることができる。昔モーセはシナイ山において主を拝した時、彼の顔はその栄光に輝いていた。昨日私たちは富士山に登ったが途中で通訳者が「今日は雲が多くて、よく見えないかも知れない」と話していたが、突然雲の切目から頂上が見えた。富士の栄光が私たちの眼前に輝いて驚いたことである。私たちはこのアシュラムで神の栄光を見たい。主イエスの御顔に神の栄光を拝したいものである。かくして私たちの品性は喜びから美へ、更に栄光へと化せられて行くのである。

二、犠牲的な奉仕

予言者は次は『あなたがたの手足を強く健やかにせよ。心おののく者よ、強くあれ』と言う。手足と心との三つが主の救いを受けて強くされる時、それは外に現われて奉仕のわざとなる。主は言われた。『夜が来れば働けない。今昼の間に働け、私のわざを見る者は更に大きなわ

編集人　海老沢宣道
発行人　大石嗣郎
定価　一部50円　〒50円

山根可弌著
『アシュラムの恵』（百円）

ざをするだろう』と。神は私たちに奉仕する手を与えて下さった。

二十年前に私は賀川豊彦先生を訪問した。その時新日本のため、新しい米国のため、新インドのために尽された彼の手を見た。その手は世界のために尽された尊い手であった。また彼は福音を宣伝えるために働いた尊い足を持っていた。神は私たちにも手と足を与えて下さった。それを御言を伝えるために用いるべきである。

三、健全な品性への医し

おののく心はいかに扱われるか。『神が来て、救って下さる』のである。私たちの病を医し、欠けを満して健全な者にして下さるのである。目が見え、耳がきこえ、足が強くなり、おしが歌えるようになる。私たちは皆、不完全なものであるが、完全な人格に成るよう期待されている。そのために神は主イエスを世に送られた。主は私たちの弱さを知って来られた。故に私たちの限界に煩らわされず主の医しを受けて高められたいものである。その事を祈り求めよう。

『どうか主よ、今私に来て下さい』。

ここで一緒にさんびか六二番（一、五節）をうたいたい。

一、主イエスのみいつと　みめぐみとを
　言のかぎりに　たたえまほし。
五、死にたる心も　活きかえらせ
　望みを与うる　み名をたたえん。

四、聖霊を受けること

イザヤは更にうたう。「荒野に水がわき、砂漠に川が流れる。燃けた砂は池となり、乾いた地は水の源となる」と。神の約束がここに与えられている。即ち聖霊はこのようにあらゆる所に注がれるという。何と美しい光景であろう。私たちに命を与える聖霊の賜を求めようではないか。

私はある時、カトマンズの南方にある富士山より高い五月の山という山に登って、蝶を採集しようとした。所がそこは八、九ケ月も雨が降らず、密林は乾き切っていた。私は蝶を追って狭谷を下りて行った。途中にも緑はなく、枯葉が一面に積っていた。一番低い谷底へ行くと急に緑の草木があり、花が咲き、蝶が舞っていた。上には何もなかったが谷底には緑が一ぱいあった。なぜかといぶかり乍らよく見ると、雑草のかげから小川の清水がわいて流れ出していた。渇きを覚えてアシュラムに来た私たちに神は聖霊をこのように注ぎ、満し、溢れさせて下さる。私たちはこれを受け、信じて生きればよいのだ。今から祈りのグループに分れて、今朝主から頂いた恵みを谷川の水のように分ち合いたい。神の全き賜を今受けとめるために、心を静め黙祷の中に満たされたい。

天の父よ。主イエスを通して私たちに聖霊を満して下さることを感謝します。この交わりの中に溢れさせて下さい。主の御名によって。アーメン。

聖書霊解（詩篇五一篇）

砕けた魂・悔いた心

海老沢宣道

クリスチャン・アシュラムに参加するには申込書と宿泊費を出して、当日時間までに会場に行けばよいというものではありません。まず開心して主の御前にひれふし、その慈愛と憐みを求めずに参加することはできません。なぜなら主の赦しなしに聖なる御前に近づくことはできないからです。ダビデ王の前半生は信仰的にも人間的にもかなり立派なものでした。神の助けによって次々に勝利を納めユダヤの王となりました。人間は名与や地位、財産を得ると忽ち高慢になるものです。物事がうまく行くと、全ては自分の能力によるものと誇ります。

聖なる主に心を開き明け渡す時、これらの思いが『もろもろのとが』であり、『私の不義、私の罪である』ことが示されます。心を全開して主の御前に出ない限り、アシュラムの恵みに浴することは困難です。主は私たちの全てを見通しておられるのに、少しでもかくそうとする思いがあるなら、それは結局、恵みを求めてはいない証拠だからです。

私たちは罪を犯した時、その結果を恐れ、人に対しては謝罪をします。しかしそれが神に対する反逆であることに気づきません。ダビデ王は地位と権力に物を言わせて、美しい人妻を横取りしても、誰も知らないと考えるほど思い上っていました。そこに予言者が現われ、罪を示された時、彼は王座からすべり下りてひれふし、ざんげの祈をしたのが、この五一篇です。『ただあなた（神）に罪を犯しました。あなたの裁きに異議はありません』というのは御心のままに絶対服従（サレンダー）しますという告白です。

有名な例話の放蕩息子は、堕落して豚小屋に寝るようになった時『我に帰って』言います。『父のもとに帰って言おう。私は天に対し、あなたに対して罪を犯しました。息子の資格はありません。雇人の一人にして下さい』と。私たちも父のもとを離れて我欲に満ちた自分中心の生活をしてきました。アダム以来の原罪の法則を受けている生れ乍らの罪人です。エデンの園から追放されて、もはや神の子の資格を失った放蕩息子でした。

しかし今は主に対して偽ることなく真実な心になりたいと願っています。しかもなお私たちにも判らない隠れた罪があります。パウロが『私は何とみじめな人間か。誰がこの死の体から救ってくれるのか』と叫んだように『ヒソプをもって清めて』頂く他はありません。いかに赤い罪も御子イエスの血によって、きよめられ、雪よりも白くされるからです。

（ロマ書十章九節）

アシュラムの五大原則

（一）キリストへの明渡し
（二）御言への絶対と従順

ダビデも放蕩息子も私たちも、罪を悔改め、砕かれた魂となりました。主は我欲をぬぐい去って、清い心を造り、聖霊を注ぎ込んで下さいました。しかし油断することなく日々に新しい霊を頂き続けなければ、また自慢の心が起ってきます。アシュラムで開心して主に明渡し、静聴の時を守り、主に従い、謙遜の徳を積んでくると、相当のクリスチャンになったように思う高慢の罪を犯しがちです。過去に聖霊の喜びを体験したとしても、現在も聖霊のきよめを受け続けていないなら無に等しいのです。

イエスを主として生活したいと願うこととイエスを実際に主として生活していることとは別物であります。私たちは自力で明渡し、新生するのではなく、主によって、私たちの骨を砕き、心も魂も徹底的に砕かれ、御霊に動かされて道を宣べ、栄光をさんびする者とせられたいものです。つまりアシュラムはどこまでもキリスト中心の他力信仰に生きる生活であります。

ダビデ王は戦勝をくり返して国家を強めたが、多くの血を流した罪の故に、神殿を建てることはできませんでした。私たちは神の御子イエスを十字架に送り、その聖血を流した罪があることを常に記憶して、かりそめにも自分は清い聖徒になったなどと、うぬぼれないように、日々にただイエスを主と仰ぎ、絶対服従の生活を送りたいものです。

『神の受けられるいけにえは、砕けた魂、砕けた悔いた心』だからです。

韓国にアシュラムの火燃ゆ

横山義孝

去る五月三十日（水）から六月四日（月）まで、池ノ上教会山根可弌師と筆者は主の深い摂理の内にソウルに於ける第一回韓国クリスチャンアシュラムに参加する機会を与えられた。これは昨年東山荘での第三回国際アシュラムに韓国から参加した林鍾守・金憲基・張永根の三牧師が、韓国にもアシュラムの火を灯したいとの深い祈りによるものであった。私たちはアジアの隣邦に、このような形で交わりの輪が広げられて行くことを感謝し目的に適う良きアシュラムが開かれるよう祈りつつ、訪韓した。顧みて、主は私たちの期待をはるかに勝って栄光を現わして下さり、日韓両国のアシュラム運動に新しい一ページを加えて下さったことを覚え、御名を心から讃美したい。

アシュラムは三一日（木）午前十時より、奉天中央教会（大韓監理会、張永根牧師）を会場として開催された。この教会は開拓数年にして四百名余の主日礼拝をしている鉄筋四階建のスマートな会堂。礼拝堂正面には歓迎!!韓国クリスチャンアシュラムセミナーと大書してある。今回の参加者は主としてソウル市内各派の教職で、ほかに長老級信徒十名ほどが加わって五十名。

まず林牧師の司会で開会礼拝、韓国讃美歌三二二番を歌い、張牧師の祈祷。女声の独唱があり、筆者が黙示録三の十四以下をテキストとして『戸を叩かれるキリスト』と題してみ言をとりついだ。過去半世紀以上の間、近くて遠い隣邦として交わりを断たれていた韓日の教会に、十字架の血の赦しの故にこのようなアシュラムの交わりが与えられたことを感謝すると共に、インドに生涯を献げた宣教師スタンレージョンズが残したアシュラム運動の意義とその恵を自らの証をもって語らせて頂いた。続いて山根可弌牧師が立ち、八十才になる同師が第二の故郷としておられる韓国に再度訪れることの出来た喜びと、アシュラムの恵とを熱涙をもって語られた。会場からはこれに応えて涙と拍手が起る感激の一時があった。続いて五大原則の内「キリストの明渡し」「御言への静聴と立証」「御霊の啓導と充満」の三つについて学びの時をもった。これは林牧師の計いで、今回のアシュラムを教職を主として学びの時としたいとの要望によったものである。

終って席を改め、奉天中央教会婦人方が準備されたお国自慢のご馳走で昼食。林牧師は出席者を一人一人紹介。遠く釜山から出席された金昌英牧師は盛んな拍手をもって迎えられた。午後のプログラムに入る前に一同玄関に整列、金潤新牧師の八ミリカメラで記念撮影。

午後2時過ぎ再開。アシュラムの凡てを経験する時間がないので、特に「静聴」「充満」に絞って実施することにし山根師が「静聴」の大切な点を指適。また筆者もその恵について証した後、第一コリント十二と十三章全体をテキストとして静聴と分ち合いの時に入った。一同は良くアシュラムのねらいとするところを聖霊によって理解し、つきづきと真実な告白による分ち合いの時を持ち得て感謝。その恵は「充満」へと導かれ、二人一組の祈りのグループも作ってお互いの深いニードと課題について祈り合うことが出来た。祈りは炎の如く堂に満ち、祈りの韓国教会躍如たるものがあった。

終りに一同スクラムを組み、祈りと変らざる主にある友情を誓い、三本指で「イエスは主である」を唱和して祝祷を受けた。最後に林牧師の提案によって今後の活動を協議する総会に入った。私たちがこのたび訪れたのも運動の継続を願ってのことでもあるので祈りをもって陪席させて頂いた。韓国はさすがに組織化が早い。早速選考委員があげられ、万場一致をもって金憲基会長以下十一名による組織が承認され、韓国アシュラムの発足を見ることが出来た。ハレルヤ。

思うに今回のアシュラムは本来の姿から見ればほんのさわりに過ぎないわけだが、二つの点で大きな希望を持つことが出来た。一つは教職を中心とするアシュラムを持ち得たこと。とかく神のみ前に砕かれ憎い教職が謙虚に砕かれ、聖霊に満たされることが出来たら、教会全体に恵が充満することは間違ない。またこの韓日のキリストにある交わりは、更に深く豊かな交わりへと成長するであろうこ

（ヒリピ書　第二章　十一節）

（三）聖霊の恵みと充満
（四）神の国の体験と献身
（五）教会への奉仕と伝道

とを信じて疑わない。

夕五時すべての日程を終了。尹愛順師宅に泊めて頂いた。林鍾守牧師は前後の丸二日余にわたり、旧五宮祕苑、博物館、板門店等各地の観光に案内して下さった。また前半は宿を共にして歓待好遇を尽して下さったことに対して感謝あるのみ。特にペンテコステ聖日を韓国で迎え私ども二人は、三つの教会の礼拝にご奉仕させて頂いた。主はアシュラムの火を大なく韓国の教会に燃え上がらせて下さることを期待しつつ、愛兄姉に見送られて帰国。栄光主にあれ。

◎第三回国際アシュラム特別献金全国募金報告

会計の収支報告は前号に掲げましたがその中に全国から金一八一七、四四六円の特別献金が捧げられたことにより全ての必要を満して余りあったことを覚え、ここに献金者名を公表して心から感謝を申上げます。

◇三〇万円　関西地区アシュラム一同
◇二三万四三〇〇円　池ノ上教会
◇二〇万円　ジョーンズ伝道継続委員会
◇一二万七九八五円　西川口教会
◇一〇万円　井本富三郎
◇四万六一〇〇円　天門教会
◇三万六五六一円　川口平和教会
◇三万円　海老沢宣道
◇二万八〇〇〇円　新宿西教会
◇二万五三八八円　碑文谷教会
◇二万五千円（2）山根可弌、西館巌
◇二万九七二円　大宮前教会
◇二万円（8）城北アシュラム、新原辿古島よね、三塚まさ、三室泰平、池本金三郎、桑原すま、広島流川教会
◇一八、五〇〇円　道南地区アシュラム
◇一万円（24）海老沢すま、海老沢有道江古田教会婦人会、加藤董子、伊藤愛信、大谷松枝、淡路久男、松田浄、赤川四郎兵衛、宇都宮充、武井啓治、横山義孝、谷本清、井本蝶子、棚田恵子萱沼孝文、河合光治、山本繁夫、植村俊雄、吉崎忠雄、小出忍、金子ハズエ大石嗣郎、五味明子
◇九、六六〇円　東小金井カンバラ教会
◇六、二五〇円　寺井俊健
◇五千円（23）土山牧羔、沢田甚、家弓三従子、満丸茂、真田絹代、今治教会沢田一雄、広岡リツ、藤井昇、中城芳枝、宇都宮美江、平松豊美、中山直良熊美枝子、戸田義雄、久保正信、鈴木ナミ、中野米子、鶴襄、河野修、佐藤熊与、清水ひとみ、松岡定雄
◇四千円　深谷教会
◇三千円（10）桜岡フジ、中屋まり子、武政悦子、吉田美代、島津昭子、下羽つね、神山良雄、二神喜十、河内三男鈴木加正
◇二千円（14）代官山教会、米田勇、吉加江常司、河原富士夫、池田八千代、黒沼栄一、窪田しげの、矢野撰一、石井寛、岡田実、鈴木長右衛門、田中しま、服部鉄之助、田村沖江
◇一千円（7）三井明、呉速臨、目良昇河村としみ、吉沼勢以、藤沢文夫、山本文子、（以上一〇三口）

▼東京城西アシュラム（第三回）
既報の通り去四月三十日、東小金井教会にて植村師を助言者に迎え「勝ち得て余りある信仰」の主題に二〇名が主の御取扱いを豊かに受けた。

▼深谷教会アシュラム（菊池いう）
去五月二〇日助言者に黒田四郎師を迎えて四二名参加、主の恵みに浴した。

▼第一回韓国アシュラム
（別記の通り）
五月三〇日～六月四日、日本から山根横山両理事をソウルに派遣五〇名の教職セミナーを守り、金憲基会長以下役員を選任、連盟組織を完了した。

▼第二回韓国釜山アシュラム
韓国連盟は早速その第二回を釜山にて七月十九日～二四日に開き、再び山根理事と有馬関東地区委員を日本から派遣した。これには百名を集める予定。次号に報告をのせる。

▼中部地区アシュラム（第十回）
九月十四、五両日に一麦教会で内村サムエル師を助言者として守る予定。

▼関東地区アシュラム（第十七回）
十月九～十一日青梅市古里福音の家にて海老沢、山根、横山、渕江、有馬、その他委員の協力の下に『全き明け渡し』を主題として守る予定。地区内約一千の教会へ案内書を発送中。

▼新潟地区アシュラム（第五回）
去る五月二七、八両日寺泊海岸でわが連盟の後宮理事が助言者として迎えられ、主題「目を覚して祈れ」の下約四〇名が恵まれ、立派な感想文集を発行した。

▼関西地区アシュラム（第十四回）
十一月二二・三両日を淀川善隣館にて地区委員の協力の下に開く予定。

▼国際アシュラム（第四回）
明年三月初め聖地ガリラヤ湖畔で、中旬インドの発祥地サトタルの五十年祭に参加開催。

▼日本アシュラム二五周年記念聖会
明年はスタンレーが日本で第一回のアシュラムを開いてから二五年に当る。ぜひ明年秋にはこの事を記念して全国的協賛の聖会を開きたいと祈る。

最新刊

海老沢宣道著

アシュラムの原則と実際

定価300円　〒60円

アシュラムの創始者・故スタンレー・ジョーンズ博士の直伝を受けた著者が，平易に解説し今回小冊子にまとめられた。参考書として活用されたい。

日本アシュラム編集部
177 東京都練馬区三原台1-18-1 海老沢方

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れて開始したもの（初期）

東京都目黒区中央町1-21-10
碑文谷教会気付

参加者が何度でも読むべきもの
『アシュラムとは何か』（初期）